和田定節 編述

開明小說

# 春雨文庫

第七號 上

A 448
13

梅亭金鵞閲

和田定節編輯

# 開明小説 春雨文庫

東京書肆 文永堂

43-7545

春雨文庫七編叙

春雨の夜一夜淋しく降はうしてや志
綴やみ雫濡さして出る軒日は詠さ雅ら
この頃思ひ乃庵は窓の障子かゆるむ
里長閑なるみ軒の雀も晴ゆる声に何
啼ふて空の嬉しげなる囀る風情は実
心地よき此時に雅遊和風の大人が仁
義禮智の信を重ね志浅からず著され

爰に此書は文庵に四神亭可楽が著す所既に
に七編といふ所ありぬ是なん大人が筆の滑
稽其の発兌を愛顧の看客会を出して
待るにそのうち此ゝ寿梓せる文永堂の主人に
軒端の雀計り黒なうで晴れ観がん心地よ
さに一日に速やか発兌を以て拙案畑が耕
園に書綴く自ら序文を為せよとの
りれ予に又直に筆を採てに漢学院

乃雀なりし勝の大傳が晴てより永
がとりぬ其言の籍もり去ぬ似して千代
と聘りもせなん

于時明治十四年菊月の
中旬東京隅田園の庵窓
に学業の暇

二世
曳富門吉誌

乃雀なる錦絵の大傳が晴てのお目見
がやどり浅其儘續き口真似して千代ツ
と囀り嗚やかましなん
干時明治十四年季月の
於東京隅田園の南窓
に学業の暇
二世
東富門吉誌

清兵エが許へ寅吉小常が文を送る

春雨文庫第七編巻之上

東京　和田定節著

○第廿五回

俗鴉啼き悪しと言て是が聲を氣に掛け又その見聞きまる物に觸れ否な辻占なるとて心を痛ましむる者あり取り分け浮たる社會には些細なることにも善悪を唱へ或ひは心を悩まし或ひは悦ばしむる類常と做せり然るに此日小常は芝居の内に在りても

何となく氣に掛る事のミ多かりし故見物一ぱい詰
込し桟敷の中といひ彼是逆上に堪ざれば江戸屋の
二階へさけ風に吹れて居ると寅吉が案内して入り
来りたる二人りの武士に居り直して不審顔「オヤ寅
さんアノ旦那方が吾儕に御用が有と被仰のでまつ
「左様さ此旦那さんは中國までの方にて兼て横田
の親方さんと御贔屓になさり一方ならぬ御懇意に
付何か内証で横田の親方に御用があれど世間を憚

る事で他へ漏ては成ねゆゑ小常さんが芝居に居る
を僥倖夫となく小常さんが是非逢たいと言ふ文言
よりて清兵衛さんを呼で貰ひたいと被仰訳と演る
側から一人の武士膝まり出して顔を和らげ「イヤ何
小常さんとやら始めてお目に掛る拙者は長州の藩
士にて萩原源内と申者なるが清兵エどのとは無
二の交りある中然るに此程おひ〳〵世間が騒〳〵しく
なるに附き表向にては関東の者へ對し遠慮の次

ありて面會致しがたけれど是非とも遇度ハね
るがある故彼是心配いたし居しに今當茶屋の表にて
寅吉に往合ひその話しを為ると夫ならバ横田氏の
贔屓に思ふ小常と言ふ婦人が今日この劇場に参り
をるに因り此者の手紙にして招きたれバ何様ま
ちがつて其筆が人手に這入ることありても叶はぬの
お名前も出さず横田氏へ崇りの参る沢も無き故コリヤ
左様あさが宜しからうとの注意実に此うへのない

良策と存じ我々兩人してお前の樂しみの邪魔とハ
思ふたが横田氏へ一筆したゝめ出して貰ひ度参ツ
た訳我々と横田氏との中ハ寅吉が宜くぞんじて居
る近頃卒示の次第ながら此方ども斗りでなく横田
氏の為なれバお前の用向にして是非とも来て呉ろ
といふことを一筆書て貰ひたいとの頼みに小常ハ差
俯き暫時かんがへ居たりしが寅吉に對ひヘアノヲ寅
さん真るにお氣の毒さまながら吾儕アお酒に酔まぎ

て手が震へ筆の持ないのさへならぬ血の道が発ツて
塩梅が悪いのだから御飯より好な芝居の中をさへ
出て一人こゝに居る位な訳迚も為なぞハ書ないか
らお断り申して下さいオヽ切ないト横を向ハ寅吉
ハ手を搓挪ゝと遣りながら寅へ然も御座いませう
が小常さん横田のお見世に取つてハ大切な旦那方
のお頼みの筋清兵工さんのお為に成ことの仰なれバ
只ヽ一筆で宜い無理でも有うが我慢をして書て上
て下さいナ去来〳〵一寸と言ひながら手を打き茶
屋の女を呼で硯箱を取りよせ小常の前へ差出せバ
小常ハ是を見も返らず小へ塩梅が悪くつて書ないと
言ふに寅さん無理ぢやア有ませんかト少し勃と為
れバ寅へ开りやアむりさ無理だけれども少しの事を
厭ツて清兵工さんのお身の上に大事でも有てハ済
ねへと思ひやをからサ小へ其様ならお前さんが往て
訳を話してお連申したら宜ぢやア有ませんか此時

武士がまさ傍からへ其るすサ既に寅吉に往て呉ろと申したら

お侍ひ方と親しくなさるのハ此節でハお家の者へ内証の御容子も忽打附

にハお話しが出来ず然りとて蔭へお呼び申して話してハお家のお方の御疑心も掛れバ何分私しでハ困るお手紙使ひなら致しませうとのるを今日横田氏に面會致さねバ横田氏の身に取り甚しき不都合が出来やうと思ふから夫で氣を揉のだがお前も寅吉の話しでハ横田氏の世話に成て居る身で見れバ朋友の此方が是ほどに氣を揉で居るのに對しても塩梅も悪からうが我慢をして一筆ぐらゐ書ないるすハ無ら

うみト言れて小常ハさし俯き心の中ニ思ふやう桂
さんや村田さんなどハ格別終ニ見さるの無人達ゆゑ
断りハ断ッさが何も彼もお任せニ成て居る寅吉の
連て来さ武士で寅吉が使ひニ往のだから間違ひの
有るるも無らう夫を無理ニ断ッて若し清兵エさん
の仏不都合ニでも成てハ悪いト思へバ少し躊躇色
目を寅吉ハ早くも見て取りてヘモシ氣色の悪いも面倒
でも有うが只一筆ちよいと来て下さいと言ふをとき

へ有がよい実ハ今日ハ是非ここへお出の積りで有
たが何程なんでもお福老さんの前へお出なさり悪
いからハ遠慮にも成さ訳所へ私がお为を直下にお渡
し申しやア清兵エさんハ夫をお屋敷のお迎ひ手紙
ろ何かよしてお出かけなさるから私の考へぢやア
清兵エの為にやア渡りに船かと思はれますなど饒
舌たてられ小常ハ何となく氣の進まざる事なる故
断りて書ざりしかど頻りに横田氏の為に成ぬの清

兵エさんに不都合が有うのと言れ跡に清兵エが平
日目を掛て居る寅吉の言ふ事ゆゑ漸く顔を上げ小へ
夫ぢやア皆さんのお持に寅さんのお言のとゆゑ一
筆で宜きやア書ませうヨと淡く硯引よせて人を取
り食ふ寅吉が工みに乗とハ白紙へ走らせ文字の自
づから渋滞も理り後で知る涙の種のまのふせは言
葉ならぬに筆止めて讀ミかへし見ツ舌打なし自烈
体三條さんに成させハ氣がゝりな辻占と思へど其

侭くる〳〵巻き封を做しツゝ三人の前へ差出し小へ唯
墨が附て居るといふ手りぢから寅吉さんが口上で
宜い様に言てお連れまうして来て下さいオヽ切ない
ト額を押へ哼息吐ツゝうつ向けた武士ハ顔見合せ
へ氣分の悪いに御迷惑で有さらうが是で清兵エ殿
の為にもなり我らが都合にも宜いといふ身の夫な
ら柊屋さんハ苦労でも此文を持横田氏まで一ト走り
往て貰ひたい弁じてお前わが是非来るやうにと

〈二三年まへなら胸を抑へて委細こゝゐと申す所
なれど頭悩に確りへンかならずお連申して参りやせ
夫ぢやア小常さんのおみは私しがお預り申しまし
て卜上書を見ながら懐中に入れへ左様なら一卜走り
往て来ませう小常さんは一息ついてから桟敷へ往き
是かふが肝心の幕だと言ふから又見物に頭痛の種
を蒔ておいでなさいト二人の武士に會釈なし二階を
下りて表へ出しが小常の後を懐中から出しちよいト

見てまた懐中へおさめながら〈小常めも武士の容
子を察したら中〻諾と言なんぞが何様やら彼様やら
安心したどれ向ふ膈の三まいで遣附ろさと獨り言
して足を早め欂屋さして急ぎたり
茲にまた横田清兵エは桂山形村田らの人〻と申し
合せ一時幕威を避んがため毛利侯の領地なれば長
州の地におもむかんとし明日はよく発足と定め
たる故朝より家に居て母の氣をとして安からしめ妹

お樂惣領徳太郎二男庄吉にも別して優しく不便を加へ妻のお岩にハ殊さら心を置き夫となく物に比へて家を頼ミ見世の番頭若い者にも夫それと指揮を做し當ぶん留守よりしても差支え無やうに心配し又我誕生の取越しなりと号し此日ハ朝から仕出屋に言ひつけ多く魚鳥を取よせて料理させつ母始め見世の丁稚臺所の下婢にまんで十分あたへ心に送別の祝ひなし其身ハ猶居間にこもり攘夷黨より

送られる書物長藩士薩藩士の書状などハ尽く纏めて如何尋ねらるゝとも知れざる処へ隠し証拠の種を断て萬一の時の用心となし心掛りのこと大畧済せければ少しく落着き火鉢に肘を持せつゝ煙管をとりて煙草ハつぎても呑さへ忘れ右左の思ひに忙然たりし時寅吉ハ麩屋町へ走りつけ俵屋の裏口より揚り例の通り座しきへ通れバ清兵エハ見てふしん顔へ寅公が今日ハ兼て頼んだ一件ト言ひながら四辺を

見まハし小聲になり「御延引までも成るのか
今時分来るハ何様した訳だ「イエ何ト言ひかけ是も
聲を竊めし「随分上等の場しよを取りお誂らへ通り
に致し一同が大よろこびで見て居りました所で小常
さんが急に旦那にお目にかゝりたいことが出来たか
ら此文を持て往て御らんに入れ直お連申して来て
呉ろとのお頼ミ故大急ぎで参りました委細ハ是に
書てありますからト出す一通の服がきハ急用とある

に清兵エハ小首を傾げながら「ハテ何が始まつたのか
大概なることなら前に頼んで有のだから左様言てよ
こさずと宜にト封をし切て開き見れバ仔細ハ何と
も書てなく只だ當方へ少しも早くお歩行を願ふと
有ばかりなる故寅吉にも訳を知らさず態と彼様し
て寅吉を使ひに被来ハ何かさしかゝりし餘儀なき訳
の出来しならん幸ひ家の内のことハ少しく片つきた
れバ一走り往て見ん然が寅吉の知らぬト言ふハ不審

さ此いそがしい中で洒落か何かに呼附られてハ詰ら
ねと思ひしゆゑ清〽文にハ何の訳とも書てねへが無
多隙をつぶさせられるのぢやア困るお前の知らねへ
事ハあるめへ一ッ穴の貉ぢやア猫へか何の用だと聞
れて扇屋ハハッと言しまゝ差支へしが天窓を掻ながら
〽エヽ何それハアノ今日ハ旦那の御用多で存じて
居るから大概ならエヽお留まうそうと存じるがエヽ
是非急にお目に懸ッてお話しをしなければ成ねへ

ことが出来たのでござりお呼び申して来て呉ろとの御懇
願実は其訳ハ何だか知りません清〽左様か夫ぢやア
仕方がねへ鳥渡往て来ませう〽夫ハ有がたい夫で
ハアノ小常さんが何様で有うかトお模様を待て居ませ
う旦那のお出に成を早く耳せてあげるがいゝ一足
お先へ出かけまさ旦那ハお支度しだい何卒お出を願
ひます左様ならバト言ひ捨ッあたふたとして帰り往
たり清兵衛ハ後見おくり〽彼の男ハ如何したのぢ

平日に変つた周章かた訳を知らぬとハ嘘で何れ仔
細のある事ならん最早小常にハ遇まいと思つたの
だが一走り往て来やうか嗚呼何にしても氣忙はし
ないにハ困るぞト言つゝ頓て身拵らへをぞ做しける

○第廿六回

西山に傾ぶく日脚に心せかれ横田清兵エハ歩行を
早め四條の芝居まち江戸屋の見世さきへ来かゝる
折しも右左よりバつと現ハれ取まく人数ハ兼て手配
りなし待設けたるものにや有ん「御用上意と聲か
けて十手振あげ打かゝれバ清兵エ早く身をかハし先
なる者の腕首を取てかへしに投除なから突立あがツ
て四辺を白眼「何故あつて此狼藉捕縛にあふべき
罪科を犯せし覚えなかつてなし手荒の振舞あるまじ
なるか役人らハ知らねども細腕なから用捨ハ致さぬ
仔細を申し聞けられよト大音聲に呼ハれども耳へ
ハ入れぬ関東武士「ものな言せぞ召捕れと言れて

清兵ヱ幕吏の嫌疑ヲ受く

〽アツと目明ら一度に飛つき組かゝるを右へ拔のけ左
に拂ひ拳にてなぎ足にて蹴かへし組子の十手うだ
ひとり東奔西馳と薙まくる勢ひ更に撓まねば元よ
り武もなく勇もなき目明どものなするゆゑ横田が
手練に辟易なし持あましたる其折から奥より立出
る兩個の役人〽ヤレ待清兵エ手むかひすな守護職の
差圖をうけ召捕りて問尋ねべき仔細のあるなり申
し開きは白洲に於て做べきぞ腕ずくで致されば身の

爲なるぞ尋常に繩を請よとの聲聞き清兵エ忽ち
姿形を正し色を和らげ兩士にむかひ〽私しるは麩
屋町にて書籍を鬻ぐを渡世と致す俵屋清兵エと申
ものゝ守護職會津侯の命とあれば聊拒む所存なし
何所へなりと罷出お尋ねの筋をうけたまはらん去来
繩を掛られよ御同道を仕らんと少しも屈せぬ大丈
夫類ひ稀なる武雄にて勤王無二の忠信なるも遂に
此とき縛に附き非業の獄屋に繫がれしは是非もな

き世の有さまなり
一説に依れバ桜屋寅吉ハ狭客風とこのミ番随院
の長兵エ野ざらし五助などの事跡を慕ひ強き
を見れバ當り弱きを見れバ助け貧困なる者にハ
我が衣服を賣りても是を救ひ仮にも非道を為さ
ざりし故清兵エハその志しを愛し常に交際を厚
くなし何ることも隠さず話し我片腕と特みたるな
り故にお岩を口説しも実ハ清兵エに特まれたるに



て清兵エハ清水寺の月照とともに勤王の徒の或
ハ死し或ハ縛に附き日に増し勢ひを減ずるを見
て我も程なく其群に落入んこと必定然るときハ我
に代りて母を養ひ妹を助け二人の子を育てる者
ハお岩なり彼ハ賢にして貞実なる性質と思ふ
ものから色ハ思案の外といへバ我料などより小
常の許へ通ひ家を外にして居る故色にハ毫も現
ハさねど心の内にハ面白からぬも思ひ居らん猶後

のするの佗きるゝゟ紙試し見るハ此時なりとて寅
吉を持て迷惑がるを無理にお岩を口説せ見しな
り然るにお岩ハ風に柳のあしらひ振なるも其中
に確呼たる貞操ありそれ寅吉が心をして数回感
動せしめしかバ此事を清兵工に厚く告げ試にも
せよ斯る貞女に戯れたる事を言ひかけ苦しませた
るハ罪深しと思ひける故実ハ其たハむれなるを
を明しお岩の心を安らせんと其折を窺ひけれど

宜き間を得ざりしが北野の天神に夜参りせらるを
耳き此処に待うけ其実を明さんとせし処豈はか
らんや両士の為に不意を打れ投出されて溺され
んとは茲に於て是を告るの便宜を失ひし内今日
のするに至りしなり然れバ此日清兵工を迎ひに往
し由実ハ清兵工を助んとの心なり其故ハかの
ぞやよりして鎖落黨にあれ関東方にあれ大藩の
武士ハかゝるべつ市中の者まで此事を専ら主張せ

しハ相互ひよ暗殺の難よ逢ひ命を全うするハ稀
なり因て寅吉ハ清兵エの身を氣づかひ他のこと
よ比へて数回風諌せしかども聴ず然れど其ま
ゝ置なバ哭東方の激徒の為よ命を失はんと殊憂ひ
然も役人の手を借り是を獄中よ捕へさせおけバ
擁夷鎖港を主とするも詰るところハ皇國を思ふの
赤心より出るの奮激なる故切るの突の騒ぎ
せぬ内なれバ大いなる科めを請ることハ無るべし役

人の手よ捕へさせるハ実よ危ふき様なれども今
日よ至り清兵エが身を保護するハ是よ増もて無
らんと思ひ明日長州へ出立するを知らざる故斯
ハ計らひつりと言ひ或ひハ此日清兵エを迎ひよ
往しハ目明の玄蔵よて寅吉ハ清兵エが縛よ附ま
で知らずして有しとも言ふ亦文の語りよハ夫い
よ反對なるなれども此末寅吉が横田の遺族へ
真実を尽しても岩よ對しても淫奔氣などハ毫も無

りしとなれバ恐らくハ此説の方誠なるんか
再説横田清兵エハ数年の困苦煎餅となり守護職の
手に捕へられるや否や清兵エが麩屋町の居宅へハ
他の役人をむかハせ家族を残らず引払わせ家財雑
具ハいふもに及バず家蔵ともに固く鎖し封印を附
たりしかバさしも繁昌なる書籍の店ハ忽ち寂漠
たる明家と変じ番頭若者子僧をはじめ召使ひハ皆
夫々の宿へ下りお岩ハ清兵エの母と長子徳太郎二

子庄吉清兵エの妹お楽とを連れ東寺のかたほとりに
清兵エが遊び場又火災の折の立のき所とせし別荘
ありけれバ清兵エの模様の分るまでとて是に逼塞
して今ハ下婢さへ下げられバお岩ハ水汲ミ米炊ぎ
煮焼の業も手一ツにて姑ならびに二人の幼稚子を養
ひ昨日に変る憂苦のなかにも頼ミとするハ夫の妹
お楽にて互に袖をぬらしあふ涙の露のちかふ草葉
れて居ても詮なかるゝと励まされつ励ましつゝ一

日ひとひと送るうち良人の安否の知れ様かと待に
詮なく過ゆきて廿日に近き日は立どもよ吹く風の
使りだにも歎きに沈み愁然たる折から次の一間なる
隔紙徐と引あけツお楽は側へ来りて居り〽お娟エ
さん嘸御不自由でお困んなさいませう夫に今
日までは彼様して居つても是から先の何様なる事
やらお兄イさんの御様子が訳らない故寔に案じら
れますヨ岩〽何様な不自由を仕やうと苦しみを仕や

す夫に厭ひは無けれどあんじられるは旦那のお身然はいへ旦那に悪い

そのあることを言ふではなし小常のお世話をなさるゝ
を妬む者から悋氣を焼のとかお役人へ讒言し
たので此御災難にあふた訳と察しられ根の無こと
に違ひないからと申し口さへ立たれば今にも放免に
成のごと世間でも噂をするそうだから大方明りが
立て程なくお帰りに成ませう然が他のことゝ違ひ真
するに案じられますよと又も塞いで溜息つけばお楽
は猶も身をよせて「イヽエ彼それはまう贔屓の人の
取り沙汰で頃日貴孃とは一所に出た時途中で聞た
咄しの通り桂さんや村田さんも関東方から手を入
るので此土地を夜に紛れは出立になり長州へお身
を隠してお仕舞遊ばしたとゆふ其様なお家長さ
んへも御不審が掛り今度の騒ぎに成るけ然から
勤王家とゆふと関東との納りの附かげんで猶大事
になるかも知れぬ其時は此方へはまず何様な悲しい
い目を見様も計られません夫故是からは神仏の御

利益を願ふより外はあるまいと思ふと実に夜の目も合ひませんヨ　岩「そんなにお前のお言ひの通り形成では信心より外に詮方がありません実は今の様に言ふもの余り苦労をしてお在のお前の心を慰める為真るを明せば今日此頃降て涌たるではなし旧くから根ざして居る様子故一寸ばかりしたる事には往まいと察しられるから此程より北野のお社へお願ひ申し塩断をして最二七日の余になれど今に少しの霊験もないはまだ信心の

足ないのか但しは協はぬ願ひか思断念ろとのお知らせかと思ふと悲しく成て来て愚痴に愚痴が重なり何様したらよからうと途方に暮思案も考へも出ませんワ夫だから此上は命の限り北野のお宮へ日参して叶はぬ迄も信心したら少しは御利益も有らうと心を定めて居ますそのサア夫は寔に兄さんの為に有がたいお心掛しも梅を一生断まして天神さまへは願をかけ昼は四辺の人目を憚り夜に成ても宵のうちは慈母さんがお眠

ぬゆゑ夜半に起てハ水を灌るのが昨日で丁度二廻り障ることの無やうに何の便りも耳ならぬのハ真に貴嫂のお考への通りに願がけの利なハお知らせかしらと思ふと気がますます苦労に成て何様したら宜うハ座いませうと泣くト言ふも母にハ耳せどその心のうちを忍び音に語りて果ハ袖ぬらすもお岩お楽の心尽しも其行末の如何ならん猶續編の巻を重ねて説解べし

春雨文庫七編之上 終